

はじめに

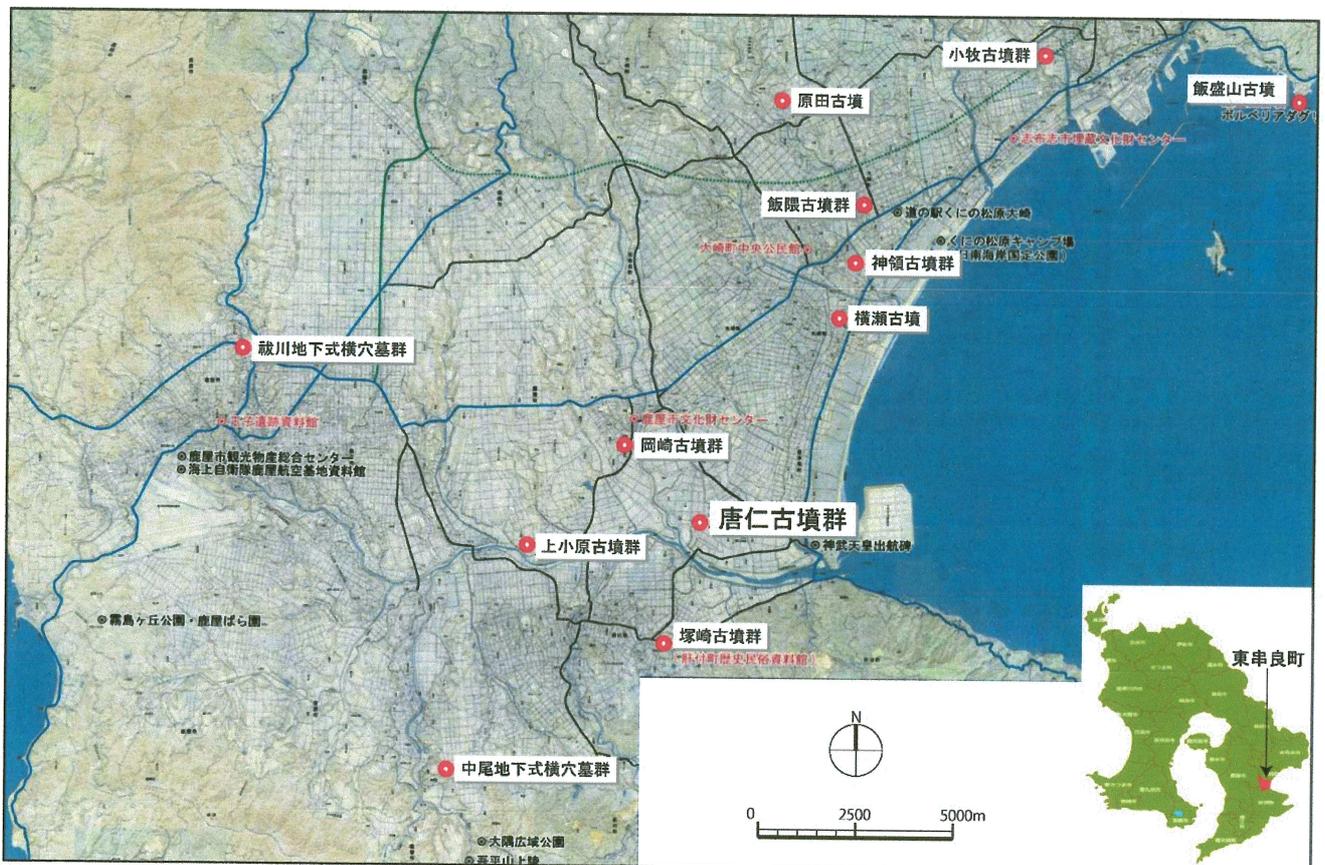
～東串良町について～

東串良町は、鹿児島県東部大隅半島の東岸に位置し、北は大崎町、南は肝属川を境に肝付町、西側は串良川を境に鹿屋市と接し、東側は志布志湾に面しており、海拔は最も高いところで77m、低いところでは2～3mで、ほとんどを平坦地が占めています。

～唐仁古墳群について～

唐仁古墳群は、本町東部から南部にかけて位置し、標高5m～6mの**大塚砂州**上に立地しており、鹿児島県肝属郡東串良町大字新川西に所在する県下最大の古墳群です。

昭和9年1月22日に「国指定史跡名勝天然記念物」として132基の古墳が指定を受けましたが、串良川の河川改修等で2基の古墳が消失し、現在は前方後円墳3基、円墳127基、合計130基の古墳が指定を受けています。



唐仁古墳群 1号墳(唐仁大塚古墳)について

～唐仁古墳群 1号墳の規模～

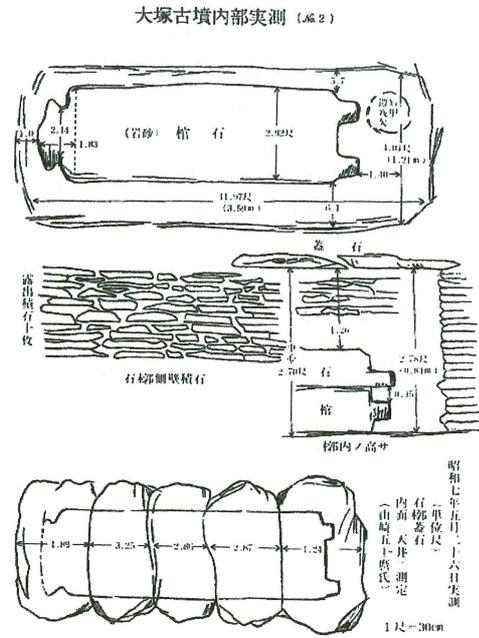
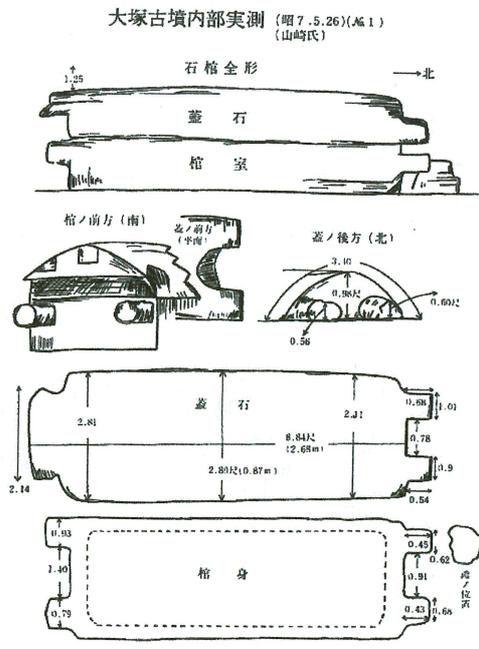
墳長	後円部径	前方長	前方幅	くびれ幅	前方高	後円高
140m	65m	70m	36m	28m	4m	10.7m

～過去の発掘調査記録～

- ・1923年(大正12年)瀬之口 伝九郎氏
- ・1930年(昭和5年)鳥居 龍蔵氏
- ・1931年(昭和6年)島戸 貞良氏
- ・1932年(昭和7年)山崎 五十麿氏
- ・1964年(昭和39年)北園 博氏

等によってこれまでに最低でも5回石室内の調査が行われています。

古墳の**主体部**は**竪穴式石室**で、その中に**舟形石棺**(長さ2.68m、幅0.87m)が置かれており、石棺外に**短甲**が確認されている。とされていますが、近年の橋本達也氏の研究で**長方板革綴短甲**である可能性が高いとされています。



※1932年(昭和7年)山崎 五十麿氏実測図



現在の1号墳主体部

平成 24 年度調査

後円部西側の周溝内に堤状の高まりがあり、この高まりが墳丘に伴う遺構かの調査が行われました。東西方向に2本の**トレンチ**を設定しましたが、出土した磁器や古銭から874年(貞観16年)以降に人為的に構築されたものであり、墳丘に伴うものではないと判断されました。

平成 31 年度調査

後円部西側の土地に便益施設の新設工事を行う際に調査が行われました。

当初、後円部に向けて斜面になっている所が**周溝**の立ち上がりと想定をしていたが、調査の結果古墳時代の層は確認されたが、遺物は出土しませんでした。

また、土層の堆積状況から1号墳の周溝は想定よりも墳丘側に存在し、周溝外側の境界は明確な立ち上がりを持たず、旧地形に沿って緩やかに立ち上がる可能性が指摘されました。



※調査状況写真

今回の発掘調査について

～土層堆積～

基本的な土層堆積としては**旧地形**である大塚砂州の上に堆積しています。

その中でも注目されるのが、指宿市開聞岳が噴火した際の噴出物である「**紫コラ**」「**青コラ**」です。

紫コラは、貞観16年(874年)に大噴火した際の火山灰だと考えられています。火山灰が紫色をしていることと、亀の甲羅のように硬いことから「紫のコウラ」→「紫コラ」と呼ばれるようになりました。

青コラは、7世紀(600年代)末に開聞岳が噴火した際の火山灰と考えられており、大隅半島でも数少ない確認例となっています。

今回の発掘調査でこの青コラの堆積が部分的ではなく、全体的に広がることが確認されたため、少なくとも7世紀末以降は人為的な掘削はされておらず、それ以前の堆積が良好に保存されている状況が確認されました。



～各トレンチの詳細～

1-A トレンチ

掘削範囲：幅 2 m、長さ 20 m

概要：砂層までの堆積は比較的浅いですが、紫コラと青コラが帯状に堆積していることが確認できます。また、東側に行くにつれ砂層が立ち上がっていくため、周溝外側の立ち上がりは旧地形の自然地形を利用して周溝を形成していると考えられます。また、周溝内にみられる丸い石は古墳ができたときに使用されていた**葺石**の一部が流れ込んだものです。



1-A トレンチ全景



1-Atr 東端北側壁面

1-B トレンチ

掘削範囲：幅 2 m、長さ 15 m

概要：トレンチ墳丘側に砂層を掘りこんだ**ピット**状の掘り込みが確認されています、土層断面の状況から紫コラ、青コラが削平を受けていないため少なくとも7世紀末以前の掘り込みであると考えられます。

このトレンチからも葺石が確認されています。



1-B トレンチ全景



1-Btr 南側壁面

2トレンチ

掘削範囲：幅2m、長さ15m

概要：2トレンチは今回の調査で唯一墳丘まで掘削を行っているトレンチで、**前方部**の墳丘が構築される手順の一部を確認することができます。

土層の堆積状況から1号墳の前方部は**地山**削り出して築造されていることが分かりました。また、墳丘の下部は砂層を削り出したものになっており、築造当時は2色に分かれた古墳だったと考えられます。



2トレンチ全景



2tr 南側土層断面

～用語解説～

大塚砂州：5,700年～5,500年前に形成された砂丘。

主体部：遺体が埋葬されている場所。

竪穴式石室：石棺を安置し、副葬品を収めた埋葬施設を保護するために周りを石で囲んだ墓室。

長方形の穴を縦に掘り天井に蓋となる石を配置する。

舟形石棺：刳抜式の石棺の一種で、形状が船のようになり、縄かけ突起が特徴。

短甲：古代の鎧の一種。鋏や組紐、革などで綴り合わせたもの。

長方板革綴短甲：短甲の一種。鉄板を長方形の板に加工し革で綴じたもの。

トレンチ：確認調査を行う際に設定される調査用の溝。

周溝：古墳の構造の1つ。「周濠」「周堀」とも呼ばれる。

旧地形：今回は大塚砂州のこと。

青コラ：7世紀末に開聞岳が噴火した際の噴出物。

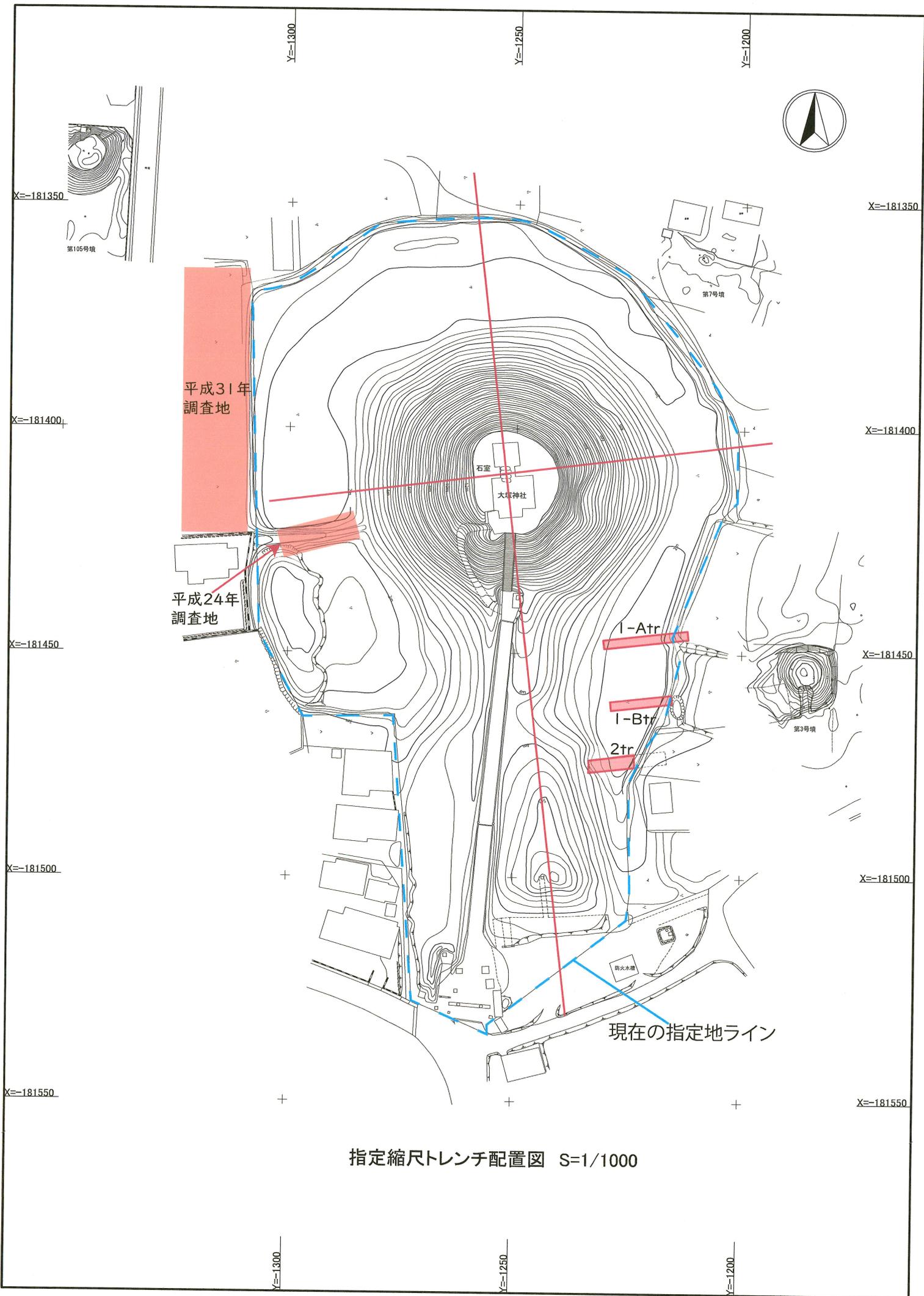
紫コラ：貞観16年(874年)に開聞岳が噴火した

際の噴出物。紫色で亀の甲羅のように固いことから「紫のコウラ」→「紫コラ」と呼ばれるようになった。

葺石：墳丘の斜面を覆う石。

ピット：柱穴や掘りこみなどの総称。

地山：天然の層。乱されていない地盤。



指定縮尺トレンチ配置図 S=1/1000

唐仁古墳群 墳丘分布図

Y=181000

X=181000

Y=181500

X=181500

1:1500

1:1500

